

論文

Linton と Cathy の第 2 世代について

—その深意と真意—

服部 茂

要 旨

Wuthering Heights (1847, Emily Brontë) は、第 15 章において、Heathcliff と Catherine の濃厚な抱擁場面でひとつのクライマックスを迎える。本来、ここで物語を終えたとしても作品として高い評価を得ていたことであろう。その後、Catherine は激しく精神を取り乱し、Cathy¹ を産みこの世を去る。Cathy の誕生後、第 2 幕として第 2 世代の物語が始まる。この第 2 幕は、Linton と Cathy の関係を通じて Heathcliff の復讐による遂行過程が描かれている。Linton 家と精神的、物理的な攻防が第 2 世代と共に展開される。Heathcliff の復讐は、息子 Linton を Cathy と結婚させることで一応の決着をみる。

Heathcliff の息子 Linton について、第 2 世代の章の半分を占めるにもかかわらず、主題として論じられることは比較的少ない。Linton は、一時的な人物、単なる父親の傀儡としてその評価は一様に低い。彼は我がままで、自己中心で、自衛本能を剥き出しに行動し、同情すらできない人物として描かれている。いつも不機嫌で、怯えているためその性格と行動は単調である。しかし、彼は Cathy と深く関わり、Heathcliff の復讐においてキーパーソンとなる。一方、Cathy は元気で、思いやりのある、純粋な少女として描かれ、概ね人物評も高い。だが、日々満たされた生活とは言い切れないところがある。彼女は不安感や恐怖感を心に抱くのである。Linton と Cathy は、子どもとして決して幸福とは言えない大人の下で生活する。

Linton と Cathy は交際をするがその関係にはそれぞれの父親の存在が背後にある。彼らは、Heathcliff と Edgar の思惑の下で行動を強いられる。この期間中の第 2 世代の物語は、父親の社会制度における男性の責務を描いているのである。特に Edgar は Thrushcross の家長として屋敷を守っていかなければならない立場にある。故に、その発想、行動は相続が彼の起点となっている。Heathcliff も Thrushcross の不動産を収奪し、所有することが目的である。彼らはこの不動産、後継者を巡って攻防するのである。Linton と Cathy の関係の背後にはこういった親たちの男の闘いがあるのである。

以上、この小論では第 2 世代の Linton と Cathy の人物像を通じて、彼らを取り巻く環境と父子関係、さらにそれぞれの父 Heathcliff と Edgar の男同士の社会的な闘いを考察する。彼ら第 2 世代の関係の背後に隠された深意と真意を検証する。

キーワード：人物像、父子、家族、相続、後継者、養育、生活環境、教育、England 社会

1. Linton Heathcliff 論：彼の苦悩について

Linton は 17 歳の若さで亡くなった。人生論を論じるには短命である。しかも、われわれが彼を知る期間はわずか 4 年間である。Linton は亡くなるまでの少年時代を the Heights で過ごす。この章では、その Linton の人物像を中心に彼を取り巻く環境と彼の両親の関係を検証する。

Linton は、London 近郊で、母 Isabella の下で 12 歳まで育てられた。Linton が Isabella によってどのように養育されたかは描かれていないが、Isabella が Linton に吹聴して伯父のことが好きになる程度までイメージできる存在になっているということは、Linton 家の教育をそのまま踏襲したことは確かである。Linton は読み書きができ、読書力が身につけていることから分かる。母の死後、一端 Edgar に引き取られ、その翌日、Heathcliff のいる the Heights へ連れて来られたため、その環境も一変する。Linton は、“But why have I (=Linton) not heard of him (=Heathcliff) before?” (20), “How am I to love papa?” I don’t know him!” (20) と突如、実父に会うことに不信を募らす。環境の変化を好まない Linton にしてみればときの経過とともに「いまさら」の感がある。Nelly は、“Oh, all children love their parents, . . .” (20) と事情を知りながら Linton を正論であしらう。

Linton と Cathy の第2世代について

Linton は初めて実父と対面し戸惑う。それは、母から聞かされていた父親象とは程遠い野性的で暴力的な人物だからである。初めて会うわが子に Heathcliff は、“Oh, damn my soul! but that’s worse than I expected—and the devil knows I was not sanguine!” (20) と第一印象を吐き捨てるように言い、“I do regret, however, that he so little deserves the trouble—if I wished any blessing in the world, it was to find him a worthy object of pride, and I’m bitterly disappointed with the whey-faced whining wretch!” (20) と失望する。Heathcliff は Hareton のような強い子どもを望んでいたのである。Heathcliff は Linton を見ながら Isabella の子育てを憎悪を込めて批判をする。“Thou art thy mother’s child, entirely! Where is *my* share in thee, puling chicken?” (20) Heathcliff は初めて会う実子に期待で緊張しそして動揺したのである。この対面の場面は、Heathcliff 流の手荒い歓迎である。the Heights に関わる際の一種の洗礼行事で、母 Isabella も the Heights へ嫁として来たとき Joseph から同じ経験をしている。Heathcliff は、悪態をついてはいるが含み笑いをしているのである。Heathcliff の物言いが荒いのでその真意を見逃しがちになる。

Linton は the Heights では邪悪な扱いを受けながら悶々と過ごす。彼は Joseph や Hareton の中であって憎悪のみを増殖せざるを得ない環境に居る。Linton はその悲痛な気持ちを Cathy に訴える場面がある。“Papa talks enough of my defects, and shows enough scorn of me, to make it natural I should doubt myself—I doubt whether I am not altogether as worthless as he calls me, frequently; and then I feel so cross and bitter, I hate everybody! . . . Only, Catherine (=Cathy), do me this justice; believe that if I might be as sweet, and as kind, and as good as you are, I would be, as willingly, and more so, than as happy and as healthy.” (24) Linton は、人格を否定され、ゆえに自我が定まらず、identity が保てないのである。彼はこの環境に苦しみもがいている。その苦しみのストレスが彼を不快な人物へと追い立てる。the Heights では彼を正しく導いてくれる人物はいない。自己肯定感も低いゆえ、軽く見られるのが耐えられない。Linton は、虚勢を張るだけで精一杯なのである。彼は、憎悪の世界に閉じ込められ出られないのである。Linton は子どもとして、苦悩していたのである。この Linton の錯綜した気持ちを聞いた Cathy は、彼の置かれた立場を理解しその後の彼との関係に心的な影響を及ぼす。

Heathcliff は Linton が彼の跡取りになるにはあまりにも弱く、病弱であるため不適格と完全に見切りをつける。さらに Linton は、肉体的には成長したが、精神的には成長できない子どものままである。その証拠に悪態をつく Linton の言葉は、無教養の Hareton とあまり変わらないのである。Hareton の場合は、教育をしない教育を施し、Linton の場合は、放任である。だが、父からは悪の精神だけは授かった。Heathcliff は、当然、父親としての

男性像を示さない。もともと彼の生い立ちから正しい子育てを期待することは無理である。しかし、Heathcliffは、LintonとHaretonの性格を正確に把握し、その心を掌握する。HeathcliffはLintonとHaretonが自分のことを父(=支配者)と見なさせることに成功している。LintonはHareton同様にHeathcliffを愛している。形や表現は違えども愛しているのである。もっとも両者にある感情は前者は恐怖心、後者は忠誠心である。「無力な人間は、自分の生命がその人にかかっているという理由で主人を愛する。子供は自分にとって必要であるというので両親を愛する。」² つまり、Lintonは、子どもとして父親を愛さざるを得ない立場なのである。

Heathcliffは、Lintonには反Linton家の思想は植えつけたのである。なぜなら、最終的な復讐手段は、LintonをCathyと結婚させることで、これは、Heathcliffにとって難関な仕事であるからである。HindleyやIsabellaそしてHaretonを虐待することは直接手を下せるので比較的簡単なことである。そして、皮肉にも、Isabellaが息子Lintonに施した教育成果は、Cathyとの結婚を実行する際に発揮される。Edgarの娘Cathyの人生に間接的に影響を及ぼしたのである。つまり、Linton家の文化がLinton家を虐待しているのである。Kettleは、Heathcliffの復讐の特徴は、“The weapons he uses against the Earnshaws and Lintons are their own weapons of money and arranged marriages.”³と指摘した。図らずも兄の子との関わりにおいてIsabellaが息子に付けた教育が結果として「文化」的武器になってしまったのである。Heathcliffの復讐の意図することの一つである。

LintonはCathyと結婚直後、危篤に陥る。HeathcliffはLintonに医者も呼ばずに死なせた印象が残る。Heathcliffは“... his life is not worth a farthing, and I won't spend a farthing on him. . . . None here care what becomes of him; if you (=Cathy) do, act the nurse; if you do not, lock him up and leave him.” (30) Cathyの助けを求める声にHeathcliffは意を介さない。これは、すでにHeathcliffは、Lintonの病気を熟知しておりある程度余命を知っていたからである。ZillahとJoseph、Haretonもその事は知っていたはずである。Lintonの死に際して彼らは驚く様子もなく各人別々の思いで反応している。Josephは喜んでいるようだし、HaretonはCathyに見とれていて無関心のようだ。Zillahもいたって冷静にその場面を語る。だから、知らぬのは、嫁のCathyだけである。もともと彼女は、Lintonの病状を交際していたときから楽観視して正確に把握していなかった。生命の可能性があれば、医者と呼んだことであろう。Hindleyの死に間際でさえ医者が呼びにやられたのである。「西ヨーロッパでかなり広く行われていた子殺しについては、それが極めて一般的に行われていたと思われる古典古代にまで遡ることができる長い歴史がある」⁴とされる。「16世紀、17世紀においては、その行為自体は国教会が重罰を果たしことによって、主に私生児をもつ未婚の母親に限定されていた。」⁵ 児童虐待は、親のフラ

Linton と Cathy の第2世代について

ストレーションのはげ口や貧困などが原因である。幼いころから労働に従事する子どももいた。西ヨーロッパでは、子どもにとって受難の時代が長らく続いたようだ。

Linton は the Heights で生活するようになってから神経症の症状を呈してくる。Linton の短い一生を考えると、決して幸福な人生ではなかった。the Heights で暮らすようになってからは Linton は微塵の愛情のかけらさえも受けられず、病弱な身体をもて余すだけであった。両親の愛情不足のため Linton の成長が止まり、成熟しなかったのである。Linton は恐怖と不安の中、Heathcliff が書いた台本の役割を演じ切る。確かに、Linton は父親の操り人形としてのみ描かれている。彼の快、不快の感情はあくまでも主観的だが人生については客観的な部分がある。たとえば、Linton は自分の死について無関心である。彼には意思がない。父親が彼の意思である。父 Heathcliff は、子どもを支配し、必要な能力を有効に使った。「神経症の発呈のひとつの原因として、愛情はあるがわがままであるとか、または権力を振ような母親を持ち、他方に、弱くて冷淡な父を持つという事実がある。この場合には、その子供は、幼少期の母の愛着に固定されたままに留まっていることになる。母親に依存し、無力を感じ、受容的な人間の特徴である渴望、とりもなおさず受けること、保護されること、愛護してもらうことへの渴望を持ち、そして父親らしい性質—訓練、独立、さらに自分自身によって生活を習熟するという能力において欠けたところのある人間として発達することになる。」⁶ Linton の場合、父親は弱くはないが母子関係には強い影響をもっていたと思われる。Linton は、母親の偏った愛情の下で育ったことであろう。彼の不幸な人生は、母親不在とそれを補う父からの正しい教育と愛情の欠如に起因する。成長過程の彼が人間愛を求めても当然である。the Heights にやって来た Linton は無条件の愛が特に Linton のような子どもには必要であったのである。

以上のような生活環境の下で、苦悩を取り除く彼の努力は、自身の利益と居場所を確保するためだけに向けられた。その生活環境と歪んだ性格ゆえに彼は自衛に躍起になったのである。そうしなければ生きていけないからである。Linton は彼なりに必死に生きた。作者 Emily も読者に媚びることなく、一貫してその性格を貫いて描き切った。⁷ 彼は小さな Heathcliff を演じたのである。Linton はそんな役割を負わされた人物である。そして、Linton は名誉を回復させることもなくその人生の幕を閉じた。

2. Catherine Linton 論：彼女の孤独と恐怖

第2世代では、Cathy が主人公である。まずは、その Cathy の人物像について代表的な意見をいくつか検証し論を進めていく。Maugham の彼女に対する人物評は、“She is a spoiled, silly, wilful, and ill-mannered creature; and you cannot greatly pity her

sufferings.”⁸ とかなり手厳しい。皮肉屋の Maugham らしい評価であるがその根拠の説明がほしいところである。もともと、彼はこの第2世代の物語を評価していない向きがある。一方、Woolf は、“it is with two Catherines; never could women feel as they do or act in their manner, we say. All the same, they are the most lovable women in English fiction.”⁹ と評価は高い。“all the same” に込められた語句に彼女らの特異性が窺われる。Woolf の人物評はいままでにないタイプの女性といったところであろう。Gilbert と Gubar は、“... Catherine II is profoundly dutiful. ... Catherine II is a cook, nurse, teacher, and housekeeper. ... Catherine II promises to become an ideal Victorian woman, ...”¹⁰ とフェミニズムの観点から全体的に Cathy が従順で男性に尽くす役割をすることから女性的な「らしさ」を指摘した。さらに Gilbert らは、“Indeed, in almost every way Catherine II differs from her fierce dead mother in being culture’s child, a born lady.”¹¹ と母親との性格の質についての違いを指摘する。実際の幼児期から少女期の Cathy について Nelly は、“... she could be soft and mild as a dove, and she had a gentle voice, and pensive expression: her anger was never furious, her love never fierce; it was deep and tender.” (18) と気性と性格を説明する。Cathy は、階級意識が高く Nelly は、“A propensity to be saucy was one” (18) と欠点も指摘する。これは、彼女が生活する場として環境がそうさせたのである。小さな女主人としてもてはやされたからである。Nelly も言うように幼児期のころは未熟であるため特に気にする気性ではない。Maugham は、こうした Cathy の性格に物足りなさを感じ、面白みがなく「平凡」な人物像から先の厳しい評価になったのかもしれない。17歳のころの Cathy は、好奇心が強く、Heathcliff の暴力にも怯まず、毅然とした態度で立ち向かう面もあることから彼女は意思をもつ人物として描かれている。他方、Cathy の生活環境は適切と言い切れない側面もある。Liddell は、Cathy は他の子どもと同様に劣悪なしつけの下で育ったと言うのは誇張だと反論し、教養のある Edgar の下で養育されたその環境の良さを指摘し、Cathy の育った環境を評価している。¹² しかし、Nelly が言う “pensive expression” (18) の面が先に引用した評価以上に Cathy の生活環境を支配する。確かに Liddell が言うように教養の面では問題はない。その一方で Cathy は屋敷以外の人物と人間関係を持たず、閉された環境で静かに勉強をして過ごす少女である。夢や目標もない。退屈な生活である。せいぜい、父と散歩する程度である。これは、若い彼女にとって健全とは言えない。Edgar が強制的に送らせている日常である。

Cathy は、表面上は元気で明るい少女であるが同時に恐れも抱いている。彼女に横たわっているものは孤独という恐怖である。その恐怖心を煽ったのは Nelly である。Cathy の行動が、たとえば Nelly が反対している Linton との交際においても、父の身体に重大な影響

Linton と Cathy の第2世代について

を及ぼすことになると言う。Nellyは彼女が軽率な行動をとれば“you might kill him (=Edgar).” (22) と重々しく彼女に警告する。これは、CathyにとってNellyが考える以上に深刻な心的影響を与えたのである。Edgarの死後の孤独の恐怖が執拗に父親への愛情に乗り移るのである。Cathyは異常なほど父を愛している。母と死別して父子家庭であるので、その父子関係において、彼女は唯一受け入れてもらうためにも従順さや主従関係は強化されるのである。

I love him (=Edgar) better than myself, Ellen; and I know it by this—I pray every night that I may live after him; because I would rather be miserable than that he should be—that proves I love him better than myself. (22)

これには、エレクトラコンプレックス (Electra complex) の感も様する。だが、母親と死別したCathyには対立する女性はいない。母親としての役割はNellyを中心に屋敷の女中らが担った。Nellyは性的対象となる女性ではない。しかも、Nellyの母親役には限界があった。それは、Cathyの気持ちを深く考えることなくEdgar中心で屋敷を守る義務からNellyは召使いの域を超えられないからである。Cathyにとって父が全てである。このとき、すでにCathyは、父の病気が重いことに気づいており、万が一のことも想定して怯えているのである。“... And what shall I do when papa and you (=Ellen) leave me, and I am by myself? I can't forget your words, Ellen, they are always in my ear. How life will be changed, how dreary the world will be, when papa and you are dead.” (22) 父と死に別れた後、彼女はどのようになるのか不安なのである。自分の行く末を案じるのである。Cathyが恐れていることは自分が孤独になることである。“I must persevere in making her (=Cathy) sad while I live, and leaving her solitary when I die. Darling! I'd rather resign her to God, and lay her in the earth before me.” (25) とEdgarも同じことを考えているのである。Edgarは自身が死ねばCathyが孤独になることは分かっている。しかし、彼は直接、娘に安心感を与えることはしない。彼ができることはThrushcrossの長子としての親子愛だけである。Cathyに彼の納得いく婿を取らせることである。これが、彼が考えるCathyへの愛である。Edgarは娘の将来を案じるのだが、それは純粋に娘の行く末の心配だけではないのである。それは、先祖から続くThrushcrossに住むLinton家の将来である。Edgarの心配は屋敷が続くかどうかである。IsabellaがHeathcliffと駆け落ちをして兄の下を去ったときも彼は同じ態度を取った。

孤独感を解消するためにCathyは父親似のLintonと交際しようとしたのである。Cathyの上質な資質、つまり慈悲深く、愛情に満ちた心をLintonに注ぐ。Lintonは悪意に満ちた

態度で抵抗する。LintonはCathyのことを正しい意味において好きではないからだ。CathyとLintonの仲は進展しない。彼は自身の病弱な身体を味方につけCathyの寛大な心を攻撃する。Cathyの好意は一方的である。彼女はそのことに気づかない。NellyはLintonの性格を早々に見抜いておりその都度Cathyに忠告をするのだが効き目が無い。これは、Isabellaが母CatherineやNellyの忠告を理解しなかったのと同じである。Cathyは一方的に愛を解釈してしまい独善的になっている。それによって彼女は大きな罫にかかるのである。Cathyもその点、自己愛が強いと言えよう。若気の至りでもあるが、Cathyの愛はプラトニックである。彼らの関係は恋愛関係ではない。母CatherineとHeathcliffの親和性の強い関係でもなく、Haretonとの親密性も薄い。彼女は、“I didn’t once think of loving him (=Linton) till—” (21) と気持ちを告白するのだがNellyは、“*‘Loving!’* cried I, as scornfully as I could utter the word. . . . Pretty loving, indeed, and both times together you have seen Linton hardly four hours, in your life!” (21) と「恋」とよべるレベルではないと否定する。しかも、その発生源が曖昧ではっきりしないのである。たとえば、LockwoodやHaretonの場合はその源泉は明確である。それは、女性の「美」に対しての性愛に基づくものである。いわゆる、男女の関係である。CathyとLintonの関係は、賢い女性と無能な男性という関係しか映らないのである。Van Ghentは、“She does her best, as infant mother, to metamorphose him, but he is an ungrateful and impossible subject. Her passionate charity finally finds her ‘married’ to his corpse in a locked bedroom.”¹³ と、Cathyの母性本能は自ら最悪の展開を招いた述べる。彼らの関係で明らかになったことはCathyの寛大さとLintonの性格の悪さに一層の確信がもてたことである。二人は成熟度においても釣り合わないのである。だから、常にCathyはLintonのことを「弟」にしか扱えないのである。その上、彼女の言う父親への愛とLintonへの愛の区別がはっきりしない。Cathyは、Lintonのことを父とNellyの次に愛しているとのこと。結果、“I should never love anybody better than papa.” (23) と言い、結論は “. . . you would live with us, and papa would be as fond of you, as he is of me.” (23) と兄弟関係を強調する。仮にLintonとの結婚生活がある程度続けば彼の専制的な態度が露になりCathyをどん底に落とし入れ、彼は、せせら笑っていたことであろう。Lintonは自尊心と欲求が満たされればそれでよいのである。CathyとLintonの関係には未来を予測させる発展性がない。そもそも、CathyはLintonと結婚して幸福な場面が語られていない。それは、後継者という社会制度の制約の下での結婚であるからである。だから、彼女は淡々とthe Heightsへ赴くのである。結婚後、作者Emilyは、即Lintonを死亡させ再起不能にして関係を打ち切る。半ば強引に幕を閉じる。夫の死で、Cathyもある意味精神上で死んだのである。Cathyは過去を清算したのであり、周辺の義理やしがらみから開放されたのである。

Linton と Cathy の第2世代について

Cathy は父の死後、Linton とともに孤独な心の隙間を埋めようとしたが叶わなかった。Cathy はこの関係において自分を必要としてくれることに重点を置いた。それが彼女なりの「恋」と解釈できる。必要とされることで孤独と恐怖から逃れ、自身を満たそうとした。Linton との交際中、彼女は退屈と不安から逃れられ、充実していたことも確かである。もし、Cathy と Linton の関係が成立するならば、それはいわゆる甘い恋愛感情ではなく、安全地帯を共有する「相互扶助」的なものである。そうであれば、お互いの恐怖 (Cathy は孤独の恐怖、Linton は父の恐怖) から逃れられるのである。Cathy は夫の死の出来事によって、彼女の明るい性格が影を潜め暫くの間別人格になる。それは、彼女の人生をリセットする期間であり、彼女が Hareton と関係を結ぶ上で理屈に合う根拠となった。Hareton との交際に Cathy の性格である “that capacity for intense attachments” (18) が良い意味で発揮される。Cathy と Linton の関係は新生 Cathy になるためには必要な通過点であったのである。

3. 父親たちの闘い：男の社会的責務

当時の England において、家父長制の下での父親の家庭内の力は大きい。家にあつてはその子どもは男児が求められ後継者として期待され育てられる。England において家族という集合体は続くことが絶対である。「家族が依って立つ先祖伝来の地所が古ければ古いほど、血統を保持しようとする意向はそれだけいっそう強烈」¹⁴ なのである。長男は家を継ぎ、守ることは必然の運命であり、「自然」なことである。Linton 家の Edgar にしても同じことである。先祖から続く Linton 家にとって Edgar 亡き後の後継者を得ることは彼の責務である。the Heights の主人となった Heathcliff さえ例外ではない。彼もまたこの跡取りの争奪戦に参戦する。

Lockwood が 1801 年に Heathcliff を訪れたとき the Heights は擬似家族として成立していた。客観的にも Heathcliff は同居する Cathy と Hareton の親として見れるのである。Heathcliff は Lockwood に家族を紹介する。そんな中、Heathcliff は主人として適切に the Heights を運営している。少なくとも人間関係やその役割は機能しているのである。彼は家族を求めていたのである。Heathcliff が少年期に Catherine とともに Thrushcross の Linton 家を覗き見た光景が鮮明に焼きついているのである。食事のときも Heathcliff は憎悪している Cathy に同席を強要する。この期間は Heathcliff が到達した理想の境地である。家族という概念に限れば、彼の最大の幸福時と言える。わずかな期間でこの擬似家族は終焉すが、Heathcliff は一家の主として満足と達成感が読み取れる。Lockwood の対応においても落ち着きを払い、一家の長として貫禄さえ感じさせるのである。

下記の引用は、Edgar (上段) と Heathcliff (下段) のそれぞれの考えである。

... though he (=Edgar) had set aside, yearly, a portion of his income for my young lady's (=Cathy's) fortune, he had a natural desire that she might retain, or, at least, return, in a short time, to, the house of her ancestors; and he considered her only prospect of doing that was by a union with his heir: ... (25)

... my son is prospective owner of your place, and I should not wish him (=Linton) to die till I was certain of being his successor. Besides, he's *mine*, and I want the triumph of seeing *my* descendant fairly lord of their estates; my child hiring their children, to till their fathers' lands for wages ...” (20)

この引用から彼らの共通して引き出せる指向は土地と後継者である。この考えは家族を持つ男としての避けがたい社会的責務である。彼らは家と社会的地位を保持するために闘いをするのである。Thruscross を巡り挑戦者 Heathcliff, 防衛者 Edgar の対立図がある。どちらも引けを取らない闘いである。Thruscross は代々続く名家であるので Edgar にはそれ相応の圧力が掛かる。Heathcliff は早々に Nelly を通じて宣戦布告をし、Edgar も自身の身体が悪くなるにつれ Nelly にこの闘いを受ける趣旨を告げる。彼らはそれぞれの息子、娘を結婚させることが目的である。「最も伝統的な結婚の動機は、家族の経済的、社会的ないし政治的な補強あるいは拡張である。これらが目的となっている場合には、結婚は、第一儀的には、結婚によって結ばれた当人たち二人にとってではなく、むしろその両親や親族にとっての具体的な恩恵の交換をめぐって、両家のあいだで交わされる契約である。」¹⁵ 彼らの場合、親同志の闘いであるのでお互いに共栄共存はできない。したがって契約は存在しない。Heathcliff は息子を利用して土地を所有し家族形成を試みるのである。Edgar も立場は違うが同じ意向である。彼らは息子、娘を代理として使い、男の闘いを始めるのである。この両者の闘いに息子 Linton と娘 Cathy が巻き込まれるのである。Berg は、“Cathy is controlled by Edgar and Heathcliff as a consequence of their continued rivalry”¹⁶ と述べ、Cathy は親たちの間での闘いにおいて、彼女の母である Catherine の役割を引き継いだのだと別視点から論じる。彼女は、父親たちの犠牲者である。

Linton と Cathy の関係は、Heathcliff が仕上げの復讐を果たす過程を描く舞台装置に他ならない。Linton は、この復讐劇の中では、中立の立場ではなく父 Heathcliff 側に付く共犯者である。Cathy の言うところの Linton との「恋」(loving) については、お互いの親が介入しているのである。双方の親のその目的は「社会的利益」のためである。二人とも打

Linton と Cathy の第2世代について

算がはたらいっている。Edgar は身体が衰弱するにつれて後継者として Linton を指名する。Cathy が Linton と交際することは Edgar の希望でもある。彼は書齋から巧妙に Cathy を遠隔操作をするのである。Nelly が Edgar との中継点の役目を果たし、実質的に実行するのは彼の意向を理解している Nelly である。禁止と制限を加えることによって彼女らの交際を刺激するのである。会いたいという欲求を制限することでさらに気持ちを高めるのである。だから、Cathy は Linton 同様に背後から操られるのである。

Heathcliff は、Linton に恋愛観を注入するが彼には他人を愛する能力がないのである。成長が止まってしまった彼には愛する行為はできないのである。せいぜいできることはもっぱら愛されるしかないのである。愛する行為は高度な人間関係である。Linton は Heathcliff の分身である。彼は強烈な自己防衛しか知らないのである。だから Heathcliff は Cathy を監禁して Linton と結婚させたのである。Heathcliff は Edgar と Cathy の親子愛をうまく利用したのである。Linton との結婚は Edgar と Cathy が自ら望んだ関係でもある。Edgar は Heathcliff の計画の趣旨を見抜いているのにもかかわらず Linton との結婚を許したのである。その時点で Linton 家は後継者を得たのである。

この闘いは Linton 家側が敗北を帰したかに見える。しかし、Heathcliff は完勝していないのである。Edgar は臨終に際して娘に会うことができ安らかに息を引き取り、Cathy も父の最期を看取れたからである。結果として Heathcliff に軍配が上がったが、本当の勝敗は Cathy と Hareton の行く末の将来まで決まらないのである。

4. 結び：親子関係と社会制度

この作品全体を通じて子どもは、環境や扱いには恵まれていない。特に Cathy は母親を知らずに育つ。子どもは可能なら両親と一緒に養育されるのが理想である。Linton と Cathy の関係から見えてくることは子としての苦悩である。子どもは、大人に対して無力であり、親の保護なくしては生きていけない。Linton と Cathy は親の事情で人生や生活に影響を受けた。彼らは大人の事情の下で生きていかななくてはならなかった。Thompson は、“... the children—without the protection of their mothers—have to fight for very life against adults who show almost no tenderness, love, or mercy.”¹⁷ と母親の不在の中、父親たちの歪んだ関係の下で生活を余儀なくされる子どもの環境の劣悪さを主張する。子どもは子どもとして生きていくことが困難であったのである。Linton と Cathy は大人の事情を知ったばかりに苦悩を味わい彼らの生活や行動が制限された。さらには成長や人生が妨げられた。

第2世代の Linton と Cathy の物語は、父 Heathcliff と Edgar の不動産所有、後継者を中

心に置く家物語である。それは、代理戦争の呈を様するかのようなのである。Heathcliffは、不動産の収奪を図り領土拡大を目論む。一方、Edgarは攻められないよう防御をする。家族の家長としての義務、使命が背後にある。あらゆる行動においても「男の義務」が根底にある。HeathcliffとEdgar双方とも必死に利益を守り生存競争を勝ち抜こうと生きている。社会制度に即して生きているのである。彼らの行動は狭く個人的なものであるが同時に社会的な内容が帯びているのである。「長子相続制は、両親と子どもの双方の行動と性格を決定し、また、子孫たちのあいだの関係を統制する上で相当な成果を上げていた。」¹⁸ HeathcliffとEdgarそれぞれの親子関係においても例外ではない。引いては、その後によくCathyとHaretonの関係にも言える。

LintonとCathyの関係を通してその背後にある深意は長子、父、男として家を守り、社会的な義務、役割を果たす男同士の闘いの物語である。父は長子に自分の財産を継がせることを求めるという観点から考えると、第2世代の真意はLintonとCathyの関係を通して家長父制を維持する過程を見せてくれる父親物語である。

註

Emily Brontë, *Wuthering Heights*, ed. David Daiches (Harmondsworth: Penguin Books, 1985) をテキストとして使用した。テキストにおいてその引用に該当する章は括弧内の数字でそれを示した。

1. 娘のCatherineをCathyと表記した。
2. エーリッヒ・フロム著、懸田克躬訳『愛するということ』（東京：紀伊國屋書店、1988年）、p.66.
3. Arnold Kettle, “Emily Brontë: *Wuthering Heights*” in *Twentieth Century Interpretations of Wuthering Heights: A Collection of Critical Essays*, ed. Thomas A. Vogler (New Jersey: Prentice-Hall, 1968), p.38.
4. ローレンス・ストーン著、北本正章訳、『家族・性・結婚の社会史 1500～1800年のイギリス』（東京：勁草書房、1991年）、p.397.
5. *ibid.*
6. フロム、p.61.
7. パトリシャ・インガム著、白井義昭訳、『時代のなかの作家たち1 ブロンテ姉妹』（東京：彩流社、2010年）の第6章において「ブロンテ姉妹は、精神異常についての理解が不完全であった時代に、精神異常者の外面世界を描き、精神異常を活写した」とブロンテ姉妹が早々に文学において精神異常を小説の人物の性格に取り上げたと記述されている。
8. W. Somerset Maugham, *Ten Novels and their Authors* (London: Heinemann, 1954), p.227
9. Virginia Woolf, “*Jane Eyre and Wuthering Heights*” in *Twentieth Century Interpretations of Wuthering Heights: A Collection of Critical Essays*, ed. Thomas A. Vogler (New Jersey: Prentice-

Linton と Cathy の第2世代について

- Hall, 1968), p.102.
10. Sandra M. Gilbert and Susan Gubar, "Looking Oppositely: Emily Brontë's Bible of Hell", in *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination* (New Haven and London, Yale University Press, 1979), p.299.
 11. *ibid.*
 12. Robert Liddell, *Twin Spirits-The Novels of Emily and Anne Brontë* (London: Peter Owen Publishers, 1990), p.72.
 13. Dorothy Van Ghent, "On *Wuthering Heights*" in *Modern Critical Interpretations: Emily Brontë's Wuthering Heights*, ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House Publishers, 1987), p.24.
 14. ストーン, p.67.
 15. *ibid.*, p.224.
 16. Maggie Berg, *Wuthering Heights: The Writing in the Margin* (New York: Twayne Publishers, 1996), p.90.
 17. Wade Thompson, "Infanticide and Sadism in *Wuthering Heights*" in *The Brontë Sisters Critical Assessments*, Vol. II ed. Eleanor McNeese (East Sussex: Helm Information, 1996), p.274.
 18. ストーン, p.69.

参考文献

- ※Englandにおける社会は、ローレンス・ストーン、北本正章訳『家族・性・結婚の社会史 1500～1800年のイギリス』（東京：勁草書房、1991年）を参考にした。
- ※父子関係に関する考察は、エーリッヒ・フロム、懸田克躬訳『愛するということ』（東京：紀伊國屋書店、1988年）を参考にした。